

2016 年 9 月

プレスリリース

企画展「猪熊弦一郎展「私の履歴書」 | 後編 東京/ニューヨーク

2016 年 11 月 19 日(土) - 2017 年 2 月 12 日(日) 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館



ニューヨークの壁（1950 年代後半から 1960 年代頃） 撮影：猪熊弦一郎

©公益財団法人ミモカ美術振興財団

【お問い合わせ先】

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

公益財団法人ミモカ美術振興財団

展覧会担当 古野華奈子

〒763-0022 香川県丸亀市浜町 80-1

Tel. 0877-24-7755 Fax. 0877-24-7766

E-mail. press@mimoca.org

猪熊弦一郎展「私の履歴書」

後編 東京/ニューヨーク

Genichiro Inokuma -My Resume

Part 2: Tokyo/New York

【概要】

展覧会名：猪熊弦一郎展「私の履歴書」 | 後編 東京/ニューヨーク

会期：2016 年 11 月 19 日(土) - 2017 年 2 月 12 日(日) 休館：年末 12 月 25-31 日 [79 日間]

時間：10:00-18:00 (入館は 17:30 まで)

会場：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 展示室 C

主催：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団

観覧料：一般 950 円 (760 円)、大学生 650 円 (520 円)、高校生以下または 18 歳未満・丸亀市在住の 65 歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方は無料

- ・同時開催常設展「猪熊弦一郎展 バランス」の観覧料を含む
- ・() 内は前売り及び 20 名以上の団体料金
- ・11 月 23 日(水/祝)は開館記念日のため観覧無料

【開催主旨】

猪熊弦一郎(1902-93)は、1979 年 1 月、日本経済新聞の人気コラム「私の履歴書」において、一ヶ月にわたり連載をおこないました。本展では、猪熊にとって唯一の自伝となったこのコラムの内容に沿って、その生涯と画業を紹介いたします。

後編となる今回*は、パリ遊学から帰国した 1940 年以降、猪熊の 30 代後半から 70 代前半までをたどります。コラムには、戦時中に従軍画家として派遣された戦地での出来事や、疎開先での画家仲間との交流、戦後 50 歳を過ぎて渡米し、ニューヨークで抽象画家として新たなスタートを切った様子やその後の活動が、画家自身の言葉で綴られており、激動の時代にありながら、一つ一つ困難を乗り越え、前進を続けた実直な生き方が見てとれます。これらの言葉を案内役に、年代を追って作品を展示、当時の書籍や猪熊が撮影した写真など貴重な資料もあわせて展観します。

*2016 年 4-6 月に「前編 絵には勇気がいる」を開催、猪熊の幼少期から東京美術学校時代、パリ遊学期までを紹介しました。

〔展覧会詳細〕

- ◎ 「私の履歴書」とは、日本経済新聞で60年続く、人気コラムのタイトルです。猪熊弦一郎の「私の履歴書」は、今から37年前、1979年（昭和54）1月1日から31日まで（1月2日は休刊）、30日間連載されました。当時76歳の猪熊がその半生を振り返ったもので、猪熊には他に自伝がなく、その画業を知る上で大変貴重な資料です。また、本コラムには、猪熊の画業にまつわる出来事に限らず、ユニークなエピソードも随所に交ぜられており、明るい語り口の、気軽に楽しめる読みものにもなっています。

- ◎ 本展では、コラムの後半部分にあたる、猪熊の30代後半から70代前半までを紹介します。1940年、猪熊は戦火を逃れてパリ遊学から帰国しますが、間もなく日本も太平洋戦争に突入し、従軍画家としてフィリピンやビルマの戦地に派遣されます。戦後は東京においてモダニズム表現の第一人者として知られるとともに、美術で人々の暮らしを彩りたいと、百貨店の包装紙デザインや、駅やホテルの壁画制作にも力を注ぎました。華やかな活躍の一方で、今一度自分の画業を見つめ直したいと、1955年、50歳を過ぎて海外へと旅立ちます。アメリカ経由で再度パリへ向かう予定が、途中立ち寄ったニューヨークに惹かれ、その先の旅程をキャンセル、同地にアトリエを構えて、その後20年間を過ごすことになります。新天地で猪熊の絵画表現は具象から抽象へと大きな変遷を遂げました。激動の時代を乗り越え円熟期を迎えたはずの画家が、そのキャリアを惜しげ無く捨て去り新しい世界に挑戦する様を追います。

- ◎ 展覧会では、それぞれの時代に描かれた作品を、エピソードとともに展示、あわせて関連する資料や写真も紹介します。画家の人柄や、その背景にある出来事と照らし合わせて作品を鑑賞することで、その絵に親しみを感じ、いつもとは違う見方でお楽しみいただくことが出来るでしょう。

〔見どころ〕

- ◎ 猪熊はコラムのなかで、ニューヨークの街で見かける壁の落書きやポスターの剥がし跡などが純粋な絵画のようであると感嘆し、夢中で写真を撮ったと述べています。当美術館の所蔵資料として残されたこれらの写真をスライドショー形式で初公開します。

〔関連書籍〕

- ◎ 『私の履歴書』猪熊弦一郎 742円（税別）＊当館ミュージアムショップにて販売中
コラムの連載を、1冊にまとめた本です。

発行：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、財団法人ミモカ美術振興財団、2003年4月

[関連プログラム]

◎キュレーターズ・トーク

本展担当キュレーター（古野華奈子）が展示室にて展覧会の見どころをお話します。

日時：会期中の毎日曜日 14:00-（他の関連プログラム開催時を除く）

参加料：無料（ただし展覧会チケットが必要です）

申込み：不要（1階受付前にお集まりください）

[同時開催展]

◎常設展「猪熊弦一郎展 バランス」

2016年11月19日(土) - 2017年2月12日(日) 休館：年末12月25-31日

展示室 A, B

[次回開催企画展]

◎開館25周年記念 MIMOCA コレクション じつはいろいろあるんです！（仮称）

2017年2月25日(土) - 5月28日(日) 会期中無休

◎志賀理江子展（仮称）

2017年6月10日(土) - 9月3日(日) 会期中無休

*志賀理江子展の会期を当初予定していた2-5月から上記へ変更いたしました。

[作家プロフィール]

猪熊弦一郎 / Genichiro Inokuma (1902-93)

- 1902 12月14日、父八太郎、母マサエの長男として、香川県高松市中新町に生まれる。
- 1921 旧制丸亀中学校（現 香川県立丸亀高等学校）を卒業。
- 1922 東京美術学校西洋画科に進学。藤島武二に師事する。
- 1926 帝国美術院第7回美術展覧会に初入選。以後、第10回、第14回で特選となるなど、1934年まで主に帝展を舞台に活躍する。
- 1927 東京美術学校を中退。
- 1936 志を同じくする伊勢正義、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、中西利雄、脇田和、鈴木誠と新制作派協会（現 新制作協会）を結成。以後、発表の舞台とする。
- 1938 フランスに遊学。アンリ・マティスに学ぶ。
- 1940 ヨーロッパの戦況が激しくなり、最後の引き揚げ船、白山丸で帰国する。
↑↑↑「前編」（4月6日-6月30日）にて紹介しました。↑↑↑

- ↓↓↓ 今回の「後編」（11月19日-2月12日）では、以下を紹介します。↓↓↓
- 1941 中国文化視察のため南京方面に派遣される。
- 1942 陸軍省派遣画家としてフィリピン戦線に派遣される。
- 1943 従軍画家としてビルマに派遣される。
- 1944 神奈川県津久井郡（現 相模原市）に藤田嗣治、荻須高德等、画家仲間と疎開。
- 1946 疎開先より東京、田園調布のアトリエに戻る。
- 1950 三越の包装紙「華ひらく」をデザインする。
慶應義塾大学壁画《デモクラシー》及び名古屋丸栄ホテル壁画《愛の誕生》に対し第二回毎日美術賞を贈られる。
- 1951 国鉄上野駅中央ホールの大壁画《自由》を制作。
- 1955 再度パリでの勉強を目指し、アメリカ廻りでの世界旅行を計画、日本を発つ。途中立ち寄ったニューヨークに惹かれそのまま留まることとし、約20年間同地で制作する。渡米をきっかけに抽象画を描くようになる。滞米中、イームズ夫妻、マーク・ロスコ、ロバート・ラウシェンバーグ、ソール・スタインバーグらと交友を深める。
- 1956 ニューヨークのウィラードギャラリーで新作個展を開催。以後、同ギャラリーの所属作家となり、1972年まで全10回の個展を開催する。
- 1965 義父を見舞うため、10年ぶりに帰国。
- 1969 日本橋高島屋等にて大規模個展、ニューヨークでの成果を日本で発表する。
- 1973 日本に一時帰国中、病に倒れる。
- 1975 ニューヨークのアトリエを引き払う。その後、冬の間をハワイで、その他の季節は東京で制作するようになる。

↑↑↑「後編」はここまで。↑↑↑

- 1979 1月、日本経済新聞コラム「私の履歴書」にて一ヶ月間連載する。
- 1989 丸亀市へ作品1000点を寄贈。
- 1991 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が開館する。
- 1992 所有するすべての作品などを丸亀市に寄贈する趣旨の文書提出。
以降、順次丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に搬入。
- 1993 東京にて逝去。90歳。

[参考図版]



「従軍」

寺内さんと私は、コレヒドールのおちるのを待っていた。（中略）一ヶ月ほど待ってようやく陥落の知らせが入った。夜中の真っ暗闇の中を船で島に上陸した。（「私の履歴書」より）

《戦ひの後（コレヒドール）》1942 年

©公益財団法人ミモカ美術振興財団



「アメリカへ」

そのころの私の絵の傾向といえば、具象と抽象の間の非常に煮え切らない“混合体”だった。心の中にはいつも、純粹になりたいという願望はあったにもかかわらず、長い間具象の影がふっ切れなかった。私は、もう一度ゼロからやり直す必要があったのだ。（「私の履歴書」より）

《馬と道化》1955 年

©公益財団法人ミモカ美術振興財団



「ニューヨーク」

ニューヨーク九十五丁目一二八番地には二年ほどいて一一五番地に移った。今度はマーク・ロスコ宅と通りを隔てて向き合っていた。この家で、第五回サンパウロビエンナーレの「極地設定」など多くの作品を描いた。（「私の履歴書」より）

《極地設定(1)》1958 年

©公益財団法人ミモカ美術振興財団